

# 船井情報科学振興財団 留学生レポート

2013年6月

澤田 真行

## 1 自己紹介

私は2013年8月よりイェール大学経済学部の博士課程に在籍する予定です。現在は東京大学大学院経済学研究科の博士課程に在籍しており、これまでに同研究科の修士課程に二年間、上智大学の経済学部に四年間在籍していました。

本レポートでは留学を志すにいたった経緯、合格して現在にいたるまでの留学準備について報告します。

## 2 留学に向けた進路決定

私が留学を志したのは、学部三年生の頃でした。私は私立大学の経済学部という環境でしたので、周囲には私のように研究者を志す人はいませんでした。ちょうどこのころ周りが就活に関する話をしはじめていて、私自身も進路についてすこし急かされるような心境でいました。

経済学というのは、他の分野に比べてアメリカへの一極集中が人材・資本の両面で進んでおり、日本は一部の教授を除いて最先端からは常に一步遅れた現状となっています。当時はまだ大阪大学などに進学して国内で研究者を目指すか、東京大学に進学して米国大学院を目指すかを悩んでいたころでしたが、指導教官から「研究者を目指すなら今や留学ぐらいするべきだ」と後押ししていただき、留学を目指すことにいたしました。

現在、日本からアメリカの経済学部大学院へと留学する人の多くは、東京大学経済学研究科を経ているかと思えます。(当然ながらすべてではありませんが。) その理由としていくつか、情報の欠如、合否に影響力をもちうる推薦状の確保等をあげることができますが、何よりも欧米大学院のほぼすべてで博士課程一年目に必修となっているマイクロ経済学、マクロ経済学、計量経済学のコアコースを厳密に導入していることがあげられると思います。基本的に修士の学生でできる研究成果は到底限られているため、経済学の基本的な素養を十分に備えているかが主な評価基準となっています。

したがって、当時の指導教官のアドバイスもあり東京大学大学院経済学研究科に進学し、留学に際しての第一の目標はコアコースを上位で突破することとなったのでした。

## 3 コアコースと英語試験

コアコースはだいたい一年次で終わりますが、私の年は多少変則的に二年次の半ばまで食い込みました。晴れて一年次のコアコースを終えるとやっと修士論文および TOEFL, GRE といった留学に向けた資格試験の準備にとりかかることができます。修士論文は結果としてなんとか教授に評価していただけるものを書くことができましたが、TOEFL には本当に苦労させられました。

米国大学院を受験するにあたって、ほとんどすべての大学院では Reading、Listening、Speaking および Writing の試験である TOEFL と、数学、語彙、作文の試験である GRE の二つを受けなくてはなりません。経済学においては、GRE の見たこともないような単語ばかりが出てくる語彙セクションはほとんど評価されず、中学数学程度の数学セクションで満点に近い点数をとることのみを求められているのでそこまで苦労はし

ませんでした。TOEFL は ibt での最低基準である 100 点をとるのにずいぶん苦勞させられました。しかしながら実際に留学を控えている今では、ibt100 点程度では足りなかったと痛感しており、語学は一生勉強だと強く感じています。

大学によっては GRE の作文セクションにも大きく比重を割いているとのことですが、詳細はわかりませんし、どうやったら点がとれるようになるのかはさっぱりわかりませんでした。ちょうどこのころ、船井情報科学振興財団から奨学生に選定いただき、いよいよ留学が現実味を帯びてきました。

## 4 出願

私は結局、アメリカの大学院に 7 校出願し、ペンシルバニア大学、ウィスコンシン大学マディソン校、およびイェール大学に合格いたしました。

出願にあたって必要だったものは主に、

- TOEFL、GRE のスコア
- 学部、研究科の成績証明書
- 出願フォームへの記入
- Statement of Purpose
- Sample Paper
- 推薦状

です。ほとんどの経済学部の出願フォームには、推薦状をウェブ上で提出するためのリンクを推薦者に送るシステムが備わっており、こちらから直接送ることはありませんでした。どの資料がどの程度参考にされるかというのは大学によるようですが、伝え聞いた話では Statement of Purpose はきちんと読む大学が多いようです。

実際のところ、私の志望している分野であるとか、修士論文で行ったことであるとかにマッチする教授が多い大学のみ合格をいただいております。SOP を書いていてもうまく志望理由がまとめられないような大学には軒並み落ちた印象がありました。

## 5 最後に

留学開始まで後二ヶ月を切り、これからやっと留學生活が始まるわけですが、ここまでの道のりですら船井情報科学振興財団をはじめ、多くの人々に支えられてなんとかやってまいりました。これからこそが正念場であるので精一杯努力して結果を出したいと考えています。